



## 建学の精神

北陸学院建学の精神は、「主を畏れることは知恵の初め」という聖書の言葉によって言い表わされています。この言葉は、神への畏れのない者は、利己的で奔放な生活を好み、他者や社会ばかりでなく自分をも滅ぼしてしまうということを暗示しています。北陸学院の教育が目指すところは、神を畏れる心を育て、他者も自分も社会をも大切に築きあげていく「本当の知恵を持つ人物の育成」です。真の wisdom を持つ人へと成長するよう全ての教育がプログラムされています。



北陸学院 校章・マーク  
1905年(明治38)制定。ヘッセルらの母校ウエスタン女子セミナーの校章に似たもので、北陸のシンボルである雪の結晶とダビデの星をかたどり、頭文字Hがあらわれています。

## 学校法人 北陸学院

〒920-1396 石川県金沢市三小牛町イ11

TEL : 076-280-3858 FAX : 076-280-3859



## 創立

北陸学院には四つのルーツがあります。

第一は、アメリカ長老教会宣教師トマス・ウィンが1883年(明治16)金沢に設けた〈愛真学校〉です。ウィンは石川県中学師範学校で2年間教鞭をとったあと、この男子中学校を興しました。これは、〈北陸英和学校〉、〈北陸学校〉を経て、「訓令第12号」公布によって廃校となりましたが、この流れが21世紀に入って北陸学院全体の男女共学化となって結実します。

第二は、〈金沢女学校〉から現在の北陸学院中学校、高等学校、北陸学院大学につながる系譜です。

金沢女学校は、1885年(明治18)に、アメリカ長老教会女性宣教師メリー・ヘッセルによって創立されました。

以後、ショー、ルーサー、ジョンストン、そして再びルーサーという4代にわたる外国人校長を助け、日本が向かっていた国家主義教育の矢面に立ったのが、中澤正七です。中澤は自身も校長に就任し、18年間にわたって学校を支えました。

戦後、学院構想の大事業遂行のために活躍したのが、いち早く再来日して保育短期大学初代学長となったアイリン・ライザーです。幾多の校名、組織変更を経て2008年(平成20)には〈北陸学院大学〉が開学し、短期大学部も男女共学となりました。

第三は、フランシナ・ポーターによって1886年(明治19)に設立された〈英和小学校〉と〈英和幼稚園〉です。彼女は愛真学校を引き継いだジェームズ・ポーターの妹で、ヘッセルの金沢女学校に触発されて、幼児・児童教育機関をつくりました。愛真学校同様、いったん閉校しますが、1961年(昭和36)北陸学院小学校として再興されました。

最後は、前述の英和幼稚園です。これを受け継いだ北陸学院幼稚園は一時、4園となり、のちに2園に統合されました。2008年(平成20)北陸学院大学が開学したとき、従来の「附属」であることを改め、北陸学院第一幼稚園、北陸学院扇が丘幼稚園として再スタートしました。

## 創立の背景と歴史

金沢での福音の種は、アメリカ長老教会宣教師トマス・ウィンとイライザ夫人によって始められました。1879年(明治12)1歳になるメアリーを連れて金沢にやって来たウィンは、日本におけるプロテスタントキリスト教宣教の先駆者サミュエル・R・ブラウンの甥でした。

横浜上陸後はしばらくの間、ブラウンとヘボンが滞在していた成仏寺に寄留し、〈バラ塾〉で英語を教えました。

ヘボンから示された宣教地は、下関における宣教師が石川県中学師範学校での理化学と英語の教師でした。ウィンは、仏教勢力がすぶる熾烈であるという理由から、敢えて金沢を選びました。

金沢には英語教師として招かれたのですが、「本職である宣教師の務めを封印したくない。日本人にキリスト教伝道をしたいのだが」と、現在の知事にあたる役職の権令に尋ねます。すると、差し支えないと回答がありました。このようにして、1881年(明治14)日本基督一致金沢教会を、3年後には愛真学校を設立しました。

北陸学院の前身である金沢女学校の創立者メリー・ヘッセルは、1853年アメリカ・ペンシルベニア州エリー・カウンティでドイツ人移民の両親の次女として生まれました。ウィンの要請で来日し、まず大阪に赴任します。1882年(明治15)大阪居留地に到着したヘッセルは、先に活動していたアレクサンダー宣教師を助けて働いていましたが、ウィンが立ち寄った際に、金沢に女学校をつくりたいという意向を伝え、金沢へ来て、まず愛真学校で教えます。

英和小学校と英和幼稚園をつくったフランシナ・ポーターも、兄のジェームズが勤めていた愛真学校で教鞭をとっています。

まだ交通が不便な時代ですから、京都から駕籠が徒歩で3、4日かかったそうです。座り慣れない西洋人が足を折り曲げて駕籠に乗るのは大変な苦痛だったと想像できます。

〈ヘッセル塾〉は東京高等女子師範学校を卒業した里見エツの協力を得て、ヘッセルの仮住まいで始められました。やがて上柿畠11番地に土地を譲り受けて、新しい校舎ができました。女子生徒のほか、金沢市内の教諭も英語を学ぶために集り、この校舎も手狭になってしまいます。ヘッセルは、アメリカ長老教会ミッションに窮状を訴え、またアメリカのキリスト教徒から多額の寄附を得て、寄宿舍付きの新校舎ができました。

当時、修身科は必修科目で、教育勅語の精神に基づいて行なわれ、キリスト教教育とは相容れない内容でした。金沢女学校では、修身科に聖書や中村正直が著した『西洋品行論』を用いることが許されていました。ウィンの伝道を許可した権令といい、金沢の行政官の懐の深さを思わせませんが、1893年(明治26)には、聖書を修身科に使うことが文部省によって禁じられてしまいました。

1891年(明治24)折から体調不良を訴えていたヘッセルは、一時帰国します。医師は彼女の再来日に反対したのですが、ヘッセルは再び金沢にやって来ます。しかし、1894年(明治27)には容態が悪化し、船で帰国したのですが、9月1日、41歳の若さで亡くなりました。



創立者 メリー・ヘッセル(1853~1894年)  
「Dear O, Kanazawa!」と口癖のように言い、心から金沢を愛しました。

